追悼抄

次回は7月13日掲載予定です

社会福祉法人「神戸福生会」理事長　中辻(なかつじ)直行(なおゆき)さん

(4月10日、肺炎で死去、62歳)

「高齢者福祉」改革の旗手

高齢者福祉の分野で「改革の旗手」と呼ばれて活躍してきた中辻さんに、最後に会えたのは今年2月だった。

介護保険を創設しようとかつて共に奔走した厚生労働省幹部や研究者らが、次々とお見舞いに駆けつけていた。戦後の福祉史に刻まれた改革を担った人たちが、中辻さんを中心に久々に集い、そこに「戦友」ともいえる絆があることを改めて知らされた。

神戸市に拠点を置く社会福祉法人の2代目経営者。全国メディアに登場したのは、1995年の阪神大震災がきっかけだった。当時「高齢者ケアセンターながた」の施設長として、倒壊を免れた自らの施設で高齢者を守る一方、被災した長田地区を歩き、避難所で衰弱した高齢者を保護する活動に走り回った。

避難生活で病気になり衰弱死する高齢者が出るなか、病院や福祉団体のネットワークを作り、事務局長として陣頭指揮をとった。被災地で起きていることを全国に発信し、福祉の若きリーダーとして一躍脚光を浴びたのだった。

忙しい仕事の合間にも、愛情を注いだ妻や3人の娘たちとの家族旅行を大切にしていた(2007年10月、スペインで)=遺族提供

震災は、老人福祉の限界を思い知らされる体験ともなった。措置制度の下では、自分の施設で被災高齢者を受け入れることは許可されず、葛藤のなかでNPO活動を展開することになったからだ。

旧来の福祉では、大災害だけでなく高齢化が進む時代にも対応できない――。そう痛感し、高齢者福祉の改革を唱えた。同じ方向に踏み出そうとしていた厚労省を後押しし、実践に基づく知恵で勇気づけたエピソードは関係者によく知られている。

「福祉の現場から進むべき方向を示してくれた。介護保険創設への貢献は本当に大きかった」と、厚労省幹部として交流してきた消費者庁の山崎史郎次長は振り返る。

いま制度疲労が指摘される社会福祉法人のあり方にも問題意識を持ち続け、業界の「異端児」「1匹狼」とも呼ばれた。税制でも守られながら、新しい社会的課題への対応が鈍い社会福祉法人への批判を正面から受け止め、「存立の理念を失えば空中分解する」と危機感を語り続けた。

その背後には、終戦後に父親が財産をなげうって作った養老院で育った「養老院の子」としての強い自負があったのは、間違いない。戦後の認可第1号だった社会福祉法人を引き継ぎ、高齢者が人として大切にされる福祉に、生涯をささげたといえる。

上智大の藤井賢一郎准教授(福祉経営学)は「今後の展望を切り開く力のある福祉のリーダーだった。もっと活躍してほしかった」と惜しむ。

(東京本社社会保障部　榊原智子)